

唐津地方の磨崖仏③

～座主磨崖仏（ざすまがいぶつ）～

◎地図・写真・統計資料など

唐津市北波多山彦字座主

この磨崖仏は、北波多の鎌倉嶽山麓南東部に当る座主という所にある。通称「山彦のお大師さま」と呼んでいる小さなお堂脇の高さ10余禰の岩壁に、西に向かって60余軀の仏像が、主に仏龕（ぶつがん）に納めた形で彫刻されている。これ等の仏像は風化が進み尊名が明らかなものは少ないが、像形から阿弥陀如来と見てとれるものが13軀、如来像と判明されるものが他に25軀ほどである。

座主の磨崖仏は大師堂附近が立地的にみても条件はよく、像容からみても古様であり、尊名は主として阿弥陀如来である。したがって浄土信仰・阿弥陀信仰の聖地として、ここから諸尊の彫刻が広がっていたと考えられる。大師堂脇の岩壁面には建物用材を取り付けるために抉（えぐ）られた4角い穴がいくつも残っている。これらは磨崖仏に対する回向供養するための場所として設けられた小さな堂宇が建築されていたことを裏付けるものである。

座主の磨崖仏には、立石石仏や鶴殿石仏にはなかった種子（しゅじ）による仏が彫刻されている。種子とは古代インドで梵語を書くのに用いる文字「梵字（ぼんじ）」で、我が国では梵語を書く文字としてだけでなく、仏・菩薩などの諸仏を表す文字の役目もした。それが「種子」である。

この種子磨崖仏は座主磨崖仏群の中では一番西方にあり、高さ約25㍎、横長の自然岩壁を向かって左から横一列に



と八つの種子が並び、したがって仏名は左から順に、観世音菩薩・阿弥陀如来・伊舎那天・勢至菩薩・阿弥陀如来・観世音菩薩・大日如来・地獄菩薩となる。

なお、左から2番目の阿弥陀如来の種子「キリーク」は蓮台の上に坐した姿とし、本尊として鄭重に取り扱うという入念な表現である。

ここの磨崖仏は種子も含め制作の時代は、確かな資料はないが彫刻技法等から室町時代のものと考えられる。

この8体の「仏」「菩薩」「天」の諸仏の性格をいうと、阿弥陀如来は、人が凡夫であっても熱心に信仰すれば極楽浄土に住生させる仏であり、観音・勢至の両菩薩は阿弥陀如来とともに念仏行者の臨終の時に極楽浄土から迎えに来るほとけである。地蔵菩薩は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道を輪廻りする人たちを救済するほとけである。なお伊舎那天は我々が住む世界の八方位と天地・日月を支配する12尊の中の1尊で国の荒乱を防ぐ徳を持つという。大日如来は人々の暮らしに隅々まで仏光を照らし、円満に暮らせるよう煩悩を打ち破り悪を撃退する徳を持つという。

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『相知の文化財』（第二集）
- ◆『肥前相知 鶴殿石仏』（九州の寺社シリーズ）九州歴史資料館 平成三年（1991、3月）／編集九州歴史資料館：発行相知町教育委員会
- ◆『佐賀県の文化財』／編集 佐賀県教育委員会

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html